

流行ニュース

シエラレオーネにおける赤痢

WHO使節団は MSF-フランス、MERLINの NGOと協力して、同国の多くの地域において集団発生が広がっていると報告した。集団発生の程度や重症度はまだわかっていない。フィールドチームは検査のためのサンプルを収集しようとしている。チームは管理、健康教育、監視体制に関して、現地医療職員とともに作業中である。治療や啓蒙活動も始まっている。

今週の話題：

<天然痘の根絶>

痘瘡ウイルス研究の WHO諮問委員会：1999年 5月の世界保健会議で、今後の国際的研究のため、現在受け入れられている場所でのみ痘瘡ウイルスの 2002年を越えない範囲内での一時的保持を決定した(決議案 WHA52.10)。16ヶ国からの委員と、基礎研究、応用研究、及び調整機関を代表する 10人の顧問からなる諮問委員会は、痘瘡ウイルスストックの廃棄に先立ち、優先的に行う研究の合意を得た。

DNA 配列決定情報：委員会は現在の痘瘡ウイルスの配列決定情報の量は不十分であるため、主要株およびは稀少株、特にコンゴ 70 とソマリア 77 から全配列の決定を行い、選択された株からのクローン収集を決定した。

診断テスト：天然痘の再発を想定した新しい診断テストの必要性に重点が置かれた。現段階で新しいタイプの診断テストは感度の良いものが開発されているが、これは臨床検体の早期診断に十分な感度を持つことの確認が必要である。

抗ウイルス薬：臨床的天然痘の治療に抗ウイルス薬が必要である。抗ウイルス薬は天然痘ワクチン予防接種後のまれな合併症の治療にとっても有効であろう。そのため、委員会は進行性痘瘡治療薬の開発と鉛化合物の完成、及び 2002年までに承認を得られるように、生きたウイルスに有効な薬剤開発を勧告した。

高力価免疫グロブリンと中和抗体：委員会はまた、天然痘の二つの流行型に対する高力価免疫グロブリンと中和抗体の供給が極端に少ないことを指摘した。これらは、予防や治療の可能性が高く、委員会は期間限定のモノクローナル抗体生産プログラムの確立を勧告した。

ワクチン：安全性と有効性のあるワクチン開発が議論された。動物を用いた古典的なワクチン産生が認可されない国が増えたため、現段階で組織培養由来ワクチンの生産が求められており生きた痘瘡ウイルスが必要とされる。承認されたワクチン産生系による組織培養由来のワクチンは最も適切な方法ではあるが、第二ワクチンの開発も望まれる。

動物モデル：痘瘡ウイルス感染動物を用いた前臨床的效果判断が新薬導入への必要性が議論された。モデル実験に適した動物はまだ見つからない。委員会は、ゲノム配列が決定された痘瘡ウイルスに感染する霊長類や他の種の検索が行われるべきと勧告した。この成果は、薬、ワクチンならびに診断薬開発に有用であろう。

研究の監督：WHOにより、将来の痘瘡ウイルス研究の監督に関して議論された。今後、痘瘡ウイルス研究を希望する科学者は、仕事を行うためにアトランタとコルトソーボにある WHO協同研究センターからの許可が必要となる。

<世界のインフルエンザ>

1998年 10月 1日 -1999年 9月 30日：1998年から 1999年は、北半球と、南半球の広い範囲でインフルエンザ A(H3N2) ウイルスが流行した。10月と 11月の間に広がりはじめ、12月にはインフルエンザ

Bの同時流行を引き起こした。北半球の大部分の国で 1月から 3月にピークをむかえた。この期間、インフルエンザ A(H3N2) とインフルエンザ Bは南半球のいくつかの国で散発的に報告された。

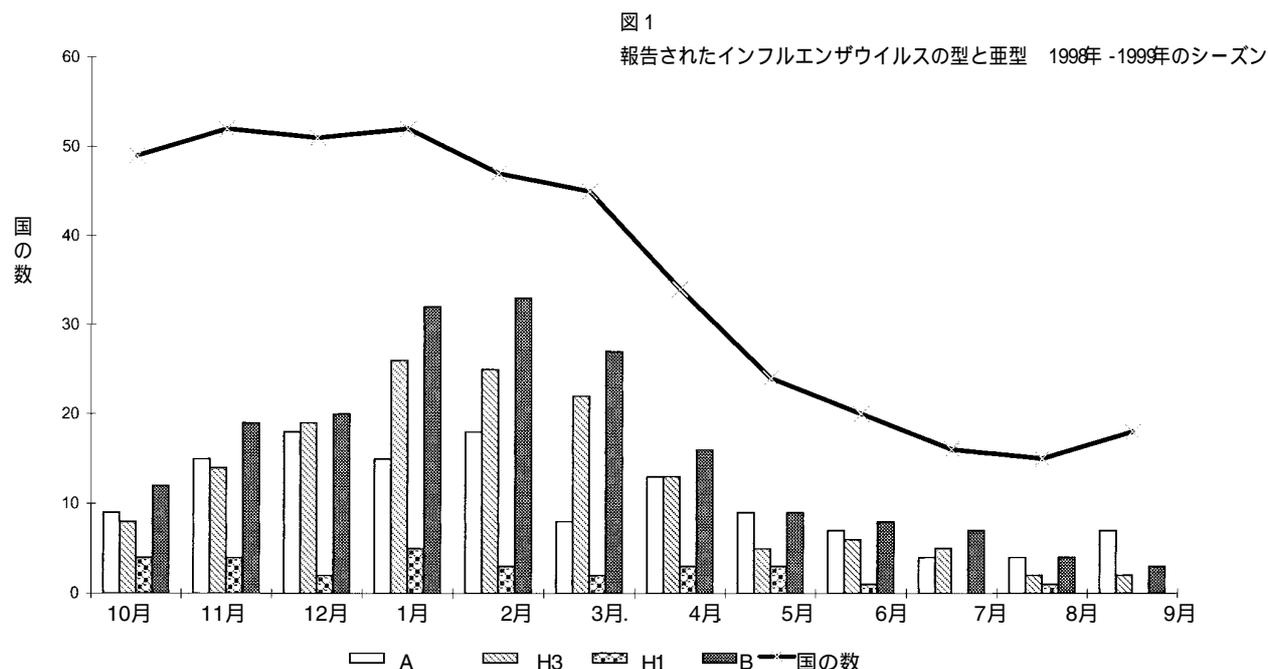


図 1 1998年 10月から 1999年 9月までのインフルエンザの流行を、インフルエンザウイルスの型、亜型別に示した。調査を行った世界 56の国あるいは地域のうち流行した国や地域の数を示した。

表 1: ウイルスの分離または直接の検出により確認されたインフルエンザ流行の範囲と型、1998年 10月 -1999年 9月 (WER参照)

流行ニュースの続報

インフルエンザ

アルバニア (2000年 2月 1日): 12月の最後の週に地域的な集団感染が報告され、インフルエンザ流行の最初の徴候が見つけた。流行は A(H3N2)型で起こり全年齢層に感染した。

ベラルーシ (2000年 2月 1日): インフルエンザ様疾患の割合が 1月の第三週にわずかに増加した。流行の激しさは増し、次週には広範囲のピークをむかえた。

ブルガリア (2000年 2月 1日): インフルエンザ流行はこの国中で 1月の最後の週にピークレベルで続いた。

クロアチア (2000年 2月 1日): 1月の第二週にむかえたピークは A型が多かった。広範囲な感染は次週も続き、A(H3N2)型が分離された。

ラトヴィア (2000年 2月 1日): 5週間連続で広範囲な流行が続いた。分離されたのは、A型、亜型、A(H3N2)A/モスクワ /10/99(H3N2) 様株であった。

ルーマニア (2000年 2月 1日): 1月の最後の週、急性呼吸器感染とインフルエンザ罹患率は北部や北東部でこの季節における通常レベルより高かった。

スロヴァキア (2000年 2月 1日): インフルエンザやインフルエンザ様疾患の罹患率は 1月の初めの三週間、全ての地域で著しく増加し、最後の週に広範囲な活動とともにピークをむかえた。特に 6歳から 14歳の小児における増加が著しかった。二つの A(H3N2)型が分離された。

(辰山佳代、寮隆吉、宇佐美眞)